

遺愛祭を通して学べること

私たちが普段学校でしている勉強は、限られた時間内で1つの答えを要領よく正確に導き出すことが多いようです。受験勉強はまさにその典型です。これも大切な勉強ですし、私たちがつけるべき能力です。しかし、学校を卒業して直面する現実の社会での課題は、様々な事柄が複雑にからみあっていて、正解が1つであるものはほとんどありません。だからといって立ち止まるわけにはいきません。答えが単純に1つに収束しないなかで、判断し、行動していかなければなりません。

遺愛祭はその良い訓練の場となっています。高3の模擬店一つとっても、どんなテーマにするか？テーマが決まっても外装、内装のデザインをどうするか？せっかく素敵なデザインを考えても、それを実際につくりあげられるかどうかは別です。経験や芸術的なセンスが求められます。メニューはどうか？どこから仕入れするか？値段をどう設定すると利益があがるのか？高すぎてもダメ、安すぎてもダメ！先払いか？後払いか？どちらがいいか？それはなぜか？雰囲気を出すための音楽は何を選ぶのか？エプロンのデザインはどうか？唯一の正解はありません。自分たちがいいなと思ってもお客さんが気に入ってくれるかどうかわかりません。事柄や状況で正解は変わります。でもよりよい解答を求めることはできます。自分が良いと思う解答でも周りを説得できなければ実現できません。プレゼン力が問われます。こだわるとどこまでも追求できますが、限られた時間の中で、限られたメンバーで、協力して作り上げていくという経験は、現実社会で生きていく上でとても大切な力を養います。それは、中学の大迷路でも、高1のステージでも、高2の催し物でも培われていくものです。

結果として、あまりうまくいかなかったと思っている人がいるかもしれませんが、こんな言葉があります。「仮に失敗してもがんばり続けた先には、将来を生きる力が残る。」本当にそうだと思います。遺愛の生徒には確実に「生きる力」がついています。

2013年7月24日（水）



それぞれのクラスが工夫をこらした模擬店の外装とエプロン